

患児への看護婦からの言葉がけの分析

—採血場面において

2階東病棟

○原田 千枝・吉野 真理・矢野 和代

田上 亜紀・若狭 郁子

I. はじめに

当院小児科の入院患者は年齢層が幅広く、看護婦は患児の疾患や性格、発達段階にあった対応を心がけ、言葉により不安や恐怖心を軽減する努力をしている。特に検査、処置場面における患児の恐怖心、拒否的な態度などに対しては、看護婦の言葉がけの影響は大きく、成否が左右されるといっても過言ではない。今までに患者と看護婦の言語的分析は数多く報告されているが、小児における看護婦の言語的働きかけの分析はほとんど報告されていない。

今回日常最も多く行われている小児の採血場面において、看護婦はどのような言葉がけを行っているかをプロセスレコードにとり、分析したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象：当院小児科病棟に勤務する看護婦 14 人と入院中の 0～12 才の患児 60 人
2. 調査期間：平成 7 年 7 月 24 日～8 年 4 月 18 日
3. データ収集：日勤帯で採血を行う看護婦 2 名と記録者 1 名が病室に入り、採血の開始から終了までの看護婦の会話をプロセスレコードにとった。
4. 分析方法：プロセスレコードにとった看護婦の言葉がけを、K J 法を用いて分類しカテゴリー化した。
5. 倫理的配慮：病室はドアを閉めカーテンで仕切りプライバシーの保護に努めた。また、患児の家族には研究方法・目的を説明し了解を得た。
6. 言葉の数え方の定義：採血を開始し終了するまでに、看護婦が患児に話しかけた言葉の 1 フレーズを 1 つの言葉がけと数えた。

III. 結果

1. 患児の年齢別分布は 0～2 才、2～4 才、4～7 才、7 才以上の群とも各 15 名であった。

2. 採血時の患児に対する看護婦からの言葉がけは全 60 場面を通し 1126 あり、KJ 法で 12 のカテゴリーに分類した。内訳は以下の通りである (表 1)。

- 1) 挨拶する (おはよう・バイバイ等 : 21)
- 2) 患児の状態を把握する (大丈夫? 痛い? 等 : 77)
- 3) 誘導する (手を見せて等 : 95)
- 4) 他の話に転嫁する (テレビは何をしてる? ・ご飯食べた? 等 : 67)
- 5) 選択させる (座ってする? ・どっちの手でする? 等 : 43)
- 6) 状況を説明する (採血です・もうすぐ終わるよ等 : 425)
- 7) 交換条件を出す (終わったら遊ぼうね・終わったら抱っこして帰ろうね等 : 22)
- 8) 励ます (頑張れ! 等 : 173)
- 9) 誉める (頑張ったね・えらいね等 : 121)
- 10) 共感する (痛いね・嫌だね等 : 51)
- 11) 謝る (ごめんね等 : 23)
- 12) 礼を言う (ありがとう等 : 8)

表 1 言葉がけの分類

大カテゴリー	数	大カテゴリー	数
挨拶する	21	交換条件を出す	22
患児の状態を把握する	77	励ます	173
誘導する	95	誉める	121
他の話に転嫁する	67	共感する	51
選択させる	43	謝る	23
状況を説明する	425	礼を言う	8

3. 看護婦からの言葉がけを年齢別に分類すると以下のような結果となった (表 2)。

- 1) 0~2才 : 15 場面で 278 の言葉がけがあり、「状況を説明する」が 118 と最も多く、「選択させる」が 0 であった。
- 2) 2~4才 : 15 場面で 324 の言葉がけがあり、「状況を説明する」が 138 と最も多く、「励ます」が 59、「誉める」が 46、「礼を言う」が 0 であった。
- 3) 4~7才 : 15 場面で 320 の言葉がけがあり、「状況を説明する」が 118 と最も多く、「励ます」が 46、「誉める」「誘導する」が各 41、「礼を言う」が 3、「交換条件を出す」「挨拶をする」が各 2 であった。
- 4) 7才以上 : 15 場面で 204 の言葉がけがあり、「状況を説明する」が 51 と最も多く、「他の話に転嫁する」が 31、「誉める」が 10、「共感する」が 7 であった。

表 2 年齢別にみた言葉がけの分類

n=60 () 内は人数

		挨拶する	状態把握する	誘導する	転嫁する	選択	状況説明	交換条件	励ます	誉める	共感する	謝る	礼を言う
0~2	278 (15)	7	32	9	9	0	118	4	53	24	16	4	2
2~4	324 (15)	5	11	22	13	3	138	6	59	46	14	7	0
4~7	320 (15)	2	9	41	14	23	118	2	46	41	14	7	3
7以上	204 (15)	7	25	23	31	17	51	10	15	10	7	5	3

IV. 考察

今回の研究に
より 60 の採血場
面に対し 1126 の
さまざまな言葉

がけがみられた。さらに KJ 法により、「状況を説明する」「励ます」「誉める」等 12

のカテゴリーに分類でき、状況に応じて多種類の言葉がけをしていることがわかった。言葉がけ全体からみると「状況を説明する」が425と最も多かった。伊東は「子供の理解力に応じて知識を与え、事実を伝えることは不安の軽減に有効」¹⁾とされており、不安の軽減、安心感を与える、協力を求めるなどの目的で言葉がけが行われていると思われる。次に多いのが「励ます」で173であった。成人においては励ましの言葉は患者にとってほんの気休めにしかならない非治療的な言葉といわれている。しかし認知発達課程にある小児は現実主義者であり、状況、言葉があるがままに受けとめやすく、長谷川は「本人の我慢を繰り返し誉めてやるのが、恐怖や不安を上まわる勇気を与える」²⁾と述べている。このような特徴から不安、恐怖を軽減させるためには「励ます」や「誉める」等の言葉がけは重要と思われた。また「状況を説明する」や「選択させる」は児の意志決定を促し、児の尊厳を守ることになる。そしてこれらの言葉がけは患児のやる気、協力性を引き出し、次の検査に取り組む患児の姿勢にもつながる。

岡田は「苦痛を伴う検査を受ける小児はそのストレスに耐えていくだけの経験や対処規制を持ち合わせていない。そのため不安や恐怖・苦痛に対して絶えず適応し、安定状態を保とうとしている」³⁾と述べている。今回の研究で得られた12のカテゴリーを通して、看護婦は小児の特徴をふまえ、アセスメントをし言葉がけを行うことで、患児の苦痛の軽減に努めていることがわかった。

看護婦の言葉がけを年齢別に分析するとそれぞれに特徴がみられた。

全言葉がけ数からみると2～4才および4～7才の言葉がけ数が最も多く、7才以上では減少している。ピアジェは「2～7才の児は言葉での説明やその理解には限界がありかつ物事の認知が、その時の知覚に目立つ事柄や部分に左右されるという特徴がある」と言う見解を述べている。また、ダラードとミラーの習慣形成理論では「幼児は病気を早く治そうとする欲求（接近勾配）が低い」⁴⁾と述べている。これらのことから児は、採血する場所に入ってきた時や看護婦の顔を見たときから、身体全体で強い拒否的態度を示すと考えられる。また言語能力も急激に発達している時期であり“痛い”“やめて”等といった言葉で感情を表現するようになる。従って看護婦は、児の不安を軽減するために、児の認知レベルに応じた言葉かける必要がある。また、児の拒否的態度は変わらないため“頑張れ”といった「励まし」の言葉がけや“もう採れてるよ”“終わったよ”といった「状況を説明する」言葉がけを看護婦は採血の間、何回も繰り返し児にかけることが必要になり、言葉の数も多くなっていると考えられる。

また0～2才および2～4才では「状況を説明する」言葉がけの小カテゴリーの中に、“お母さん外で待っててもらおうね”“お母さん外にいるよ”といった母の存在を示す

言葉が多くみられた。ピアジェは幼児は母親に依存しながらも自律感を獲得している段階にあると言う考えを述べている。しかし、入院している児は病院という慣れない環境や苦痛を伴う処置を受けることで、母親への依存性や分離不安が強くなっていると考えられる。看護婦は採血中の児に母親の存在を伝えることで、児の不安の軽減に努めている。

2～4才および4～7才では、「選択させる」「誉める」という言葉がけが多く用いられていた。田島らは「この時期の児は、発達してきた能力を実際に発揮して、自分一人のできることに喜びを感じ、次第に何でも自分一人でやろうとしはじめる段階にある」⁵⁾と述べている。看護婦は児との関わりの中でこのことを理解し、採血場面においても“いつしたいのか”“どこでしたいのか”等児に選択させたり、また児の態度を誉めるといった言葉をかけている。これらのことは児に“自分でできる”という認識をもたせることとなり、入院していても発達を促すことができていると考える。

また7才以上では「他の話に転嫁する」言葉がけが多くみられた。発達段階が進むにつれ児は採血の必要性が理解でき、採血の苦痛はあっても羞恥心や自尊心のため泣いたり、わめいたりといった態度は示さなくなる。岡田は「処置時に表出されてない苦痛をくみとり、児の緊張をほぐすことが必要である」⁶⁾と述べている。看護婦は児の不安を軽減するために、前日のテレビの内容や児の服装などについて話すことで、児の気持ちをそらせることに努めていると考えられる。

以上のことから看護婦は実際の採血場面において多種多様な言葉がけを行っていた。これらの言葉がけは、児の不安を軽減させるために、多方面から児をとらえそれぞれの発達段階における特徴や個別性を考慮したものであると言える。

V. 結論

今回の研究を通して、採血時の患児への看護婦からの言葉がけについては以下のことが明らかとなった。

1. 採血場面において多種多様な言葉がけが行われており、12のカテゴリーに分類できた。
2. 12のカテゴリーのなかでは「状況を説明する」の言葉がけがもっとも多かった。
3. 言葉がけの数を年齢別にみると2～4才および4～7才が多かった。
4. 患児の年令により、言葉がけの数やカテゴリーに違いがあった。

引用・参考文献

- 1) 伊東和子：検査処置時における不安への援助，小児看護，13(11)，p1473，1990.
- 2) 長谷川浩：不安を抱く子供の理解と援助，小児看護，13(11)，p1458，1990.
- 3) 岡田洋子：検査を拒否する患児への対応，小児看護，15(8)，p944，1992.
- 4) 中西信男：パーソナリティ論，看護 Mook35，金原出版，p365，1995.
- 5) 田島信元他編著：子供の発達心理学，福村出版，p98，1995.
- 6) 岡田洋子：検査を拒否する患児への対応，小児看護，15(8)，p945，1992.
- 7) 宮井千恵：小児の採血時における言語活動—特に同調傾向・難易度・部署などの関連について，日本看護研究会雑誌，p150，1993.
- 8) 田原幸子、池田明子、太田喜久子他：看護とコミュニケーション，看護 Mook17，金原出版，1986.
- 9) 岡堂哲雄監修：小児ケアのための発達臨床心理，へるす出版，1983.
- 10) 池田明子：看護における言葉のケア効果について，小児看護，10(9)，p6-9，1995.

〔平成8年11月21日，京都市にて開催の第27回日本看護学会
(小児看護)で発表〕